

とにかく静かなスナメリ

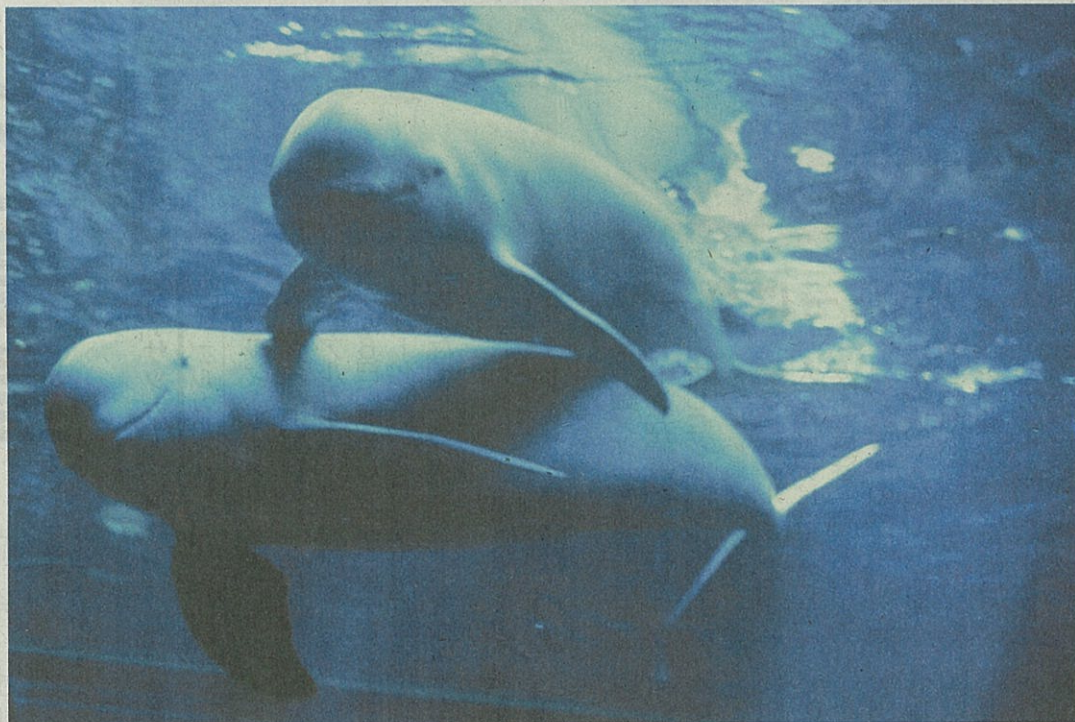
須磨海浜水族園 亀崎園長の

あっぱれ!

水の動物たち



④播磨灘を2匹で泳ぐスナメリ⑤淡路島西方沖を群れて泳ぐスナメリ。餌の魚を追いかける時にはよく群れになると言われる



南知多ビーチランドのスナメリ同ビーチランド提供

瀬戸内の思わぬ「保護区」

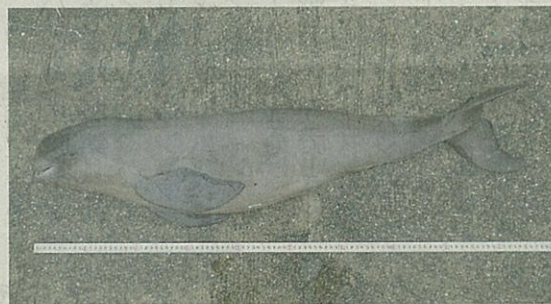
瀬戸内海といえは日本で最も広い内海である。内海は栄養がたまりやすく、植物プランクトンがたくさん繁殖し、豊かな海であることが多い。豊かで静かな海であるなら、本来ならばクジラが来て体を休め、ウミガメも餌を求めて入ってくるはずだ。実際、海外にはそんな入り江や湾などが残されている。

ところが、瀬戸内海は静かな海の面影はない。海岸線は工業地帯や港湾に占められ、海上は船が盛んに往来し、海中は魚を取る網でかき回されている。それでも瀬戸内海には少なくなったとはいえ、タコやアナゴやタイがすみ、この季節ならイカナゴを大量に生み出し、我々の味覚を楽ませてくれる。そんな瀬戸内海で細々と命をつないできたのがスナメリである。イルカの仲間ではあるがとにかく目立たない。

目立たない理由は、その行動と背びれない背中が原因があると思われている。岡山の牛窓でスナメリを調べているO氏に連れられて、カヤックで行ったことがある。海面を凝視していると、スナメリがクルンと水面に現れずぐ消える。背びれないので見つけにくい。しかも、波紋は立たないし、クジラのように大きな呼吸音もしないので、まったく目立たない。

須磨海浜水族園ではスナメリを何とか守ってやりたいと考え、N氏を研究員として雇っている。彼女は大学時代からスナメリを追いかけたツワモノだ。彼女の仕事で最も重要なのは、海の男たちか

死んで海岸に打ち上げられたスナメリの赤ちゃん。生まれてすぐ死ぬことが多いようだ



ら情報を集めることである。漁師や船乗りを声をかけ、スナメリ情報をもらえる体制を構築していく。女に頼まれると、この男も弱い。彼女の携帯電話が鳴ると彼らから「今、スナメリ2匹、泳いでるぞ」という情報が入る。

ところが、とにかく目立たないスナメリを探すには、やはり空からがいい。年に1、2回は「園長、△△航空、○○円で軽飛行機飛ばしてくれるらしいです。飛んでいいですか」などと、水族園のポンプ音のうるさい狭い通路で呼び止められる。その価格交渉の鮮やかさに驚き、おもわず反射的に「おお、ええぞ」となってしまふのである。

彼女のもう一つの重要な仕事は死体収集だ。

「園長、あの冷凍庫のウミガメの死体、何とかしてくださいますか。入らないじゃないですか」

「何が」「スナメリ」
こんな会話の後、彼女は出刃包丁やらブルーシートを持

って出掛けていき、異臭を放つ体で戻ってくるとブルーシートに包んだ死体を冷凍庫に収容するのである。

そんな努力のいかいもあり、彼女の元に、スナメリデータが集積され、だんだんとその実態が見えてきた。調査開始当初はもう絶滅寸前ではと危惧していたが、大阪湾や播磨灘にはスナメリが生きていたのである。特に重要なのは、関西空港の周辺や瀬戸内海の小島が密集している海域である。関空の周辺は船の侵入が制限されており、当然漁業も行えない。小島が多い海域では、船は近づけないし、漁業もしにくい。そんな海域があるから、スナメリはそこを避難先として生活し、生き残ってきたのではないかと考えている。関西空港の経営は莫大な負債などさまざまな問題を抱えているが、スナメリ保護には多大な貢献をしている可能性がある。がんばれ、関空。



亀崎直樹 (かめざき・なおき) 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。